

難波宮跡発掘調査（NW06 - 2次）現地説明会資料

2006年9月23日（土）

大阪市教育委員会
財団法人 大阪市文化財協会

はじめに

大阪市教育委員会と(財)大阪市文化財協会は2006年7月から大阪市中央区内久宝寺町2丁目で難波宮跡の発掘調査を実施してきました。

難波宮跡では、1954年以来実施されてきた調査により、大きく分けて前期・後期2時期の宮殿跡が確認されています。前期難波宮は大化改新に伴う難波遷都により652年に完成した宮殿であり、後期難波宮は聖武天皇の時代に一時(744年)首都となった宮殿です。難波宮の中心部は現在史跡難波宮公園となっています。

今回、調査を行っている個所は、朝堂院より南西約150mにあたる位置です。従来の調査結果では、難波宮造営以前に谷であったことがわかっていました。

今回の調査地の西側で1990年に行った調査では、前期難波宮を造営するに際して、谷を埋立てるために大規模な盛土をして整地を行ったことが確認されています。また、その盛土の直下では、ウシ・ウマの骨が大量に見つかっており、前期難波宮造営時に何らかの儀礼が行われたことが推定されています。また、盛土の下からは百済の土器も出土しており注目されている場所です。

調査の結果

(地層の堆積状況)

今回の調査では、地表面から約5.6m下まで調査を行いました。その結果、大坂夏の陣後の厚い整地層(第1層)、豊臣氏大坂城期の3期にわたる整地層(第2～4層)、中世の作土層(第5層)、前期難波宮造営時の整地層(第6層)、それ以前の谷の埋土層(第7層)が堆積していることが確認されました。

第1層は、厚さ1.2m前後の、砂や粘土が混る層で、一気に埋め立てられていました。その下面には焼土層が認められる個所がありました。出土遺物などから、第1層は大坂夏の陣(1615年)後になされた大規模な整地層であることが判明しました。なお、第1層の上面からは18世紀以降の井戸や土壌などが見つかりました。

第2～4層は、合せて約1mの厚さで堆積していました。出土した遺物の詳しい検討はこれから行いますが、第2層から見つかった遺構は、豊臣氏大坂城後期(1598～1615年)、第3・4層上面の遺構は豊臣氏大坂城前期(1580～1598年)のものと考えられます。それぞれの上面からは、井

戸・溝・土壌・建物の礎石などが見つかりました。

第5層は、灰色の粘土層で厚さは0.5m前後あり中世の作土層であると考えられます。

第6層は、0.5～0.9mの厚さで、前期難波宮造営時に埋立て、整地された地層です。この層は谷の中心部にいくにしたがって厚くなっています。

第7層以下は、造営に係る整地以前に谷を埋めている地層です。今回の調査では北西隅で、谷の落ち際を見つけることができましたが、急激に深くなっており、谷底を検出することはできませんでした。この地層からは、前期難波宮以前の時期の土器などが多く見つかりました。現在、これらの遺物の整理を進めているところです。

第8層については、谷斜面の堆積物または埋立て土と思われませんが、今回の調査では一部を掘り下げたにとどまりました。

(第7層中検出遺構)

谷の落ち際付近で、幅約1.0mで深さ1.0m以上の溝が見つかりました。この溝の方向は北東～南西で、調査地内で見えるかぎり、谷の方向に平行しているようです。また、柱穴あるいは土壌が1基見つかりました。1辺1.0mの隅丸方形で、深さは約0.4mです。

以上の溝・柱穴あるいは土壌は第7層の途中から掘られており、前期難波宮造営時に行れた整地にはいくつかの段階があったことがわかりました。ただし、出土した遺物の年代から考えて整地は短期間に行れたであろうと推測できます。

まとめ

今回の調査では、自然の谷地形が埋められていく過程を良好に観察することができました。谷が大規模に埋立てられていくのは、おもに前期難波宮造営の時期、豊臣氏が大坂城を築いた時期、大坂夏の陣後の時期の3時期です。特に、前期難波宮造営に関する整地の状況の一端が確かめられたことは重要です。今回の調査地は宮殿に近接しており、宮殿周辺に存在した谷を埋立てて整地し、起伏の少ない地形を造り出したことがわかりました。

以上のように、大阪の歴史上重要な出来事にともなう整地を同時に確認することができたことが、今回の調査の大きな成果と言えます。今後、周辺の調査が進めば、さらに新たな成果が得られましょう。

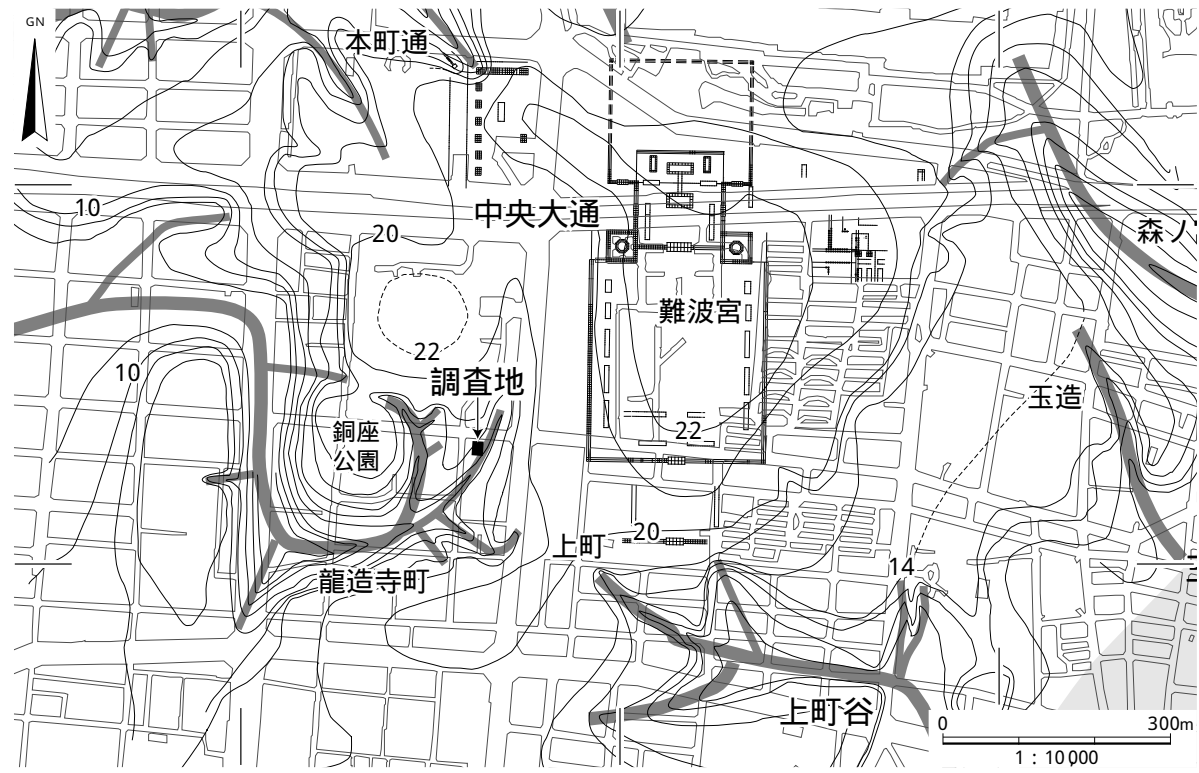


図1 難波宮跡周辺の旧地形復原図

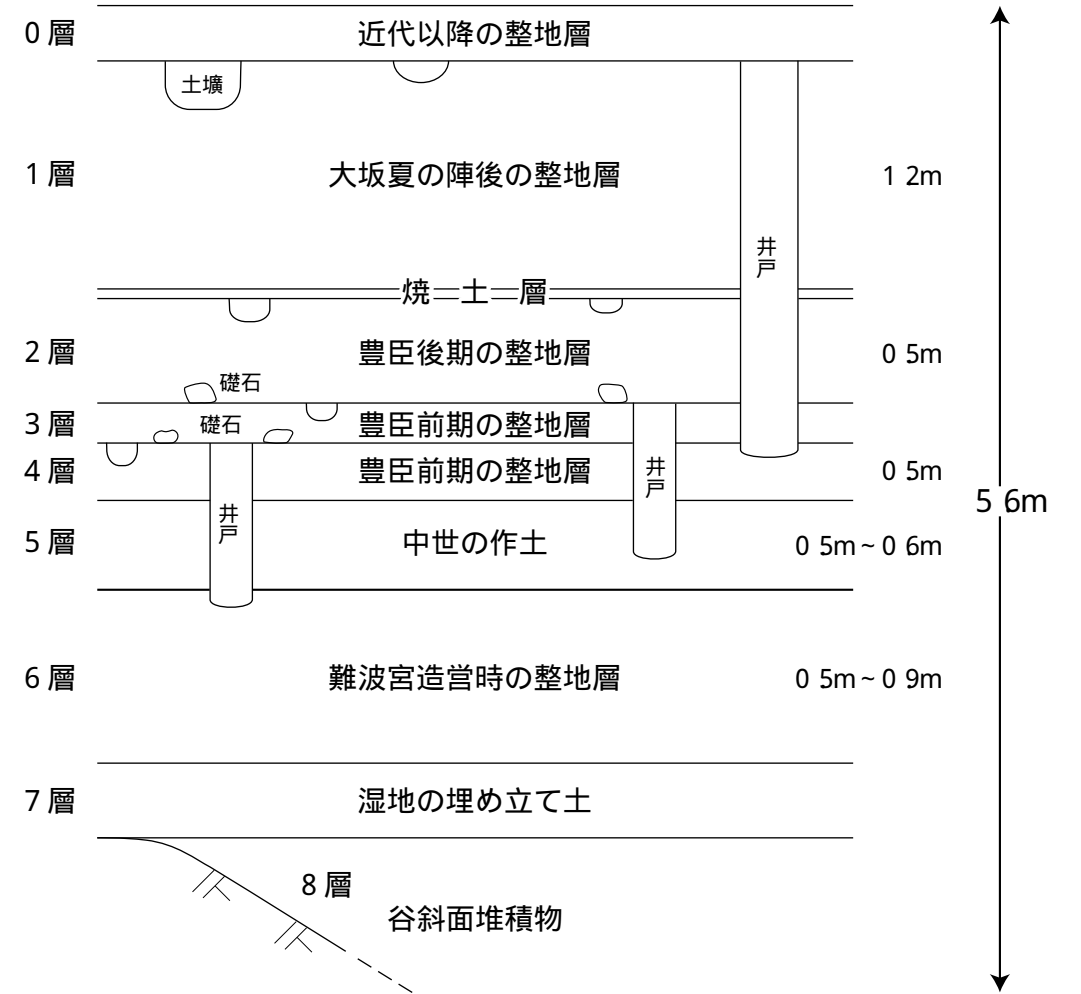


図3 地層堆積状況概略図

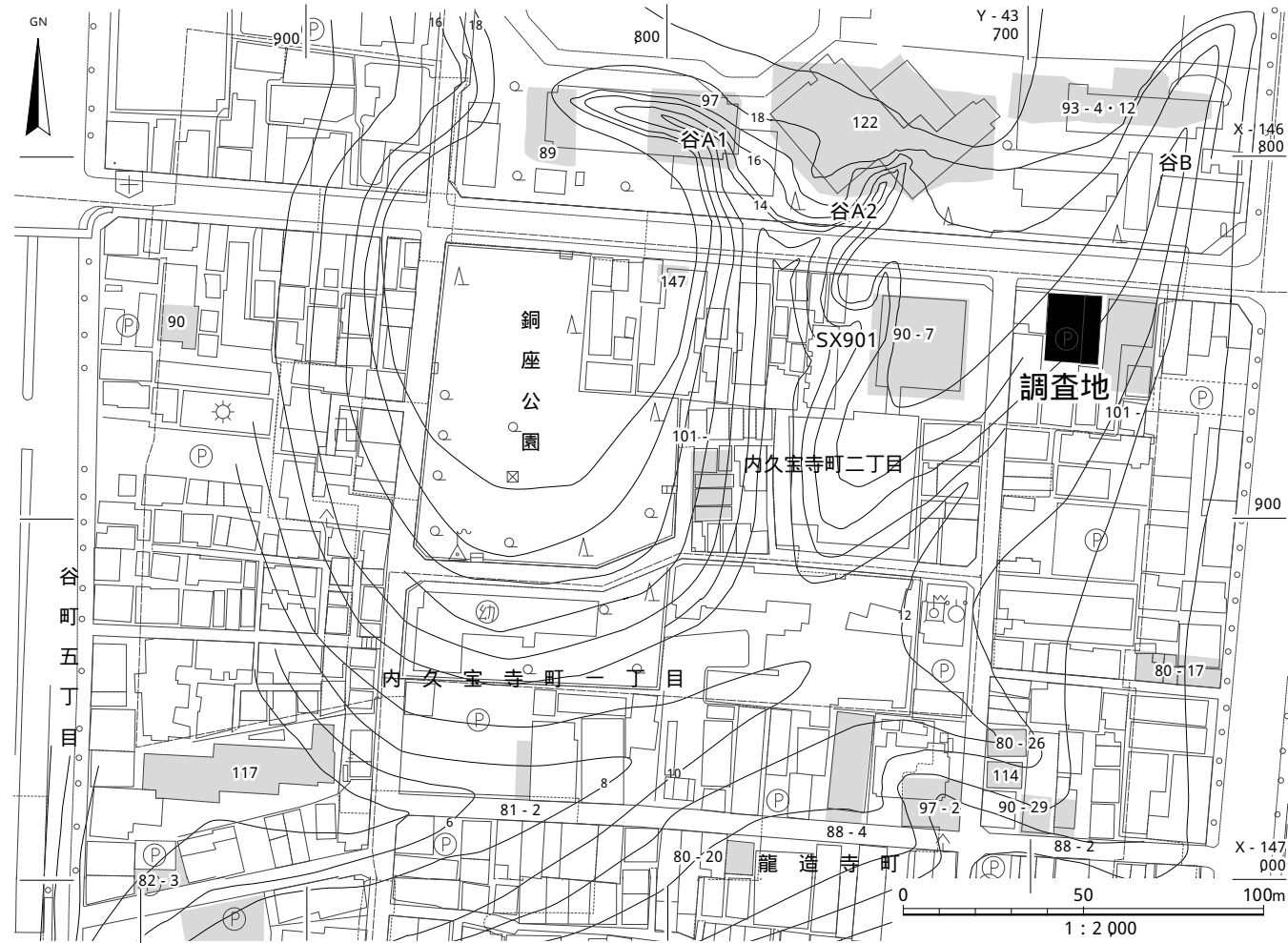


図2 調査地周辺旧地形復原図

